様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３３９４３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０７１８

研究課題名（和文）日本人英語への肯定的認識を学習者の国際発信力につなぐ国際英語教育

研究課題名（英文）Pedagogical Significance of Japanese English from EIL/ELF perspective

研究代表者
小宮　富子（KOMIYA, TOMIKO）

岡崎女子大学・子ども教育学部・教授

研究者番号：４０２０５５１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、国際英語論の視点から、独自的個性をもった成熟した日本人の英語の存在を確認すること、及び、日本文化を反映した日本人英語への適切な理解と肯定的認識が日本人学習者の英語による国際発信力の育成に肯定的な影響を与えることの検証であった。
日本人英語の文法特徴や語用論的特徴の分析を行い、モダリティ表現・間接表現・話題化の多用や、「意味的な限定の緩やかさ」が見られるという結果を得た。また、コーパスから日本人学習者の英語発話量が他のアジア圏学習者より少ない事実も判明した。大学生を対象に国際英語論の知識と「多様な英語への受容性・英語発信力」との関係を調査し、相関性を持つことが確認された。

研究成果の概要（英文）：The aims of the present study are 1)to make clear grammatical and pragmatic features of Japanese English which reflect cultural characteristics of the Japanese language, 2) and to elucidate pedagogical effects of EIL/ELF theories in higher education. Characteristic features of Japanese English such as thematization, frequent use of empathic expressions, etc. were identified. Using the data from the Corpus ICNALE-Spoken, we examined the word-per-minute (WPM) in L2 English speeches by Japanese learners and found that the WPM of Japanese learners was less than the WPM of most Asian learners of English. We also identified some co-relation between learners' familiarity to basic ideas of EIL/ELF and their commitment to English communication.

研究分野：人文学

キーワード：国際英語　日本人英語の特徴　コーパス　英語教育　ＥＬＦ

１．研究開始当初の背景

国際的普及に伴う英語の変容は、英語を第二言語として使用する Outer Circle 圏のみでなく、英語を外国語とする Expanding Circle 圏でも生じうるものであり、EC 圏に属する日本人の英語も必然的に日本文化や日本語の影響を受けて変容する。国際英語論は母語話者英語至上主義を排し、英語の多様化と英語変種間の平等性を指摘した点に意義がある。本研究は科学研究費助成研究挑戦的萌芽研究「日本人英語における『イノベーション』を国際発信力につなぐ国際英語教育」（代表者小宮富子、課題番号 23652150、平成 23 年度～25 年度）の発展的研究としての位置づけを持っている。同研究では、アジア 10 か国の英語学習者 1300 人のエッセイを収録した学習者コーパス ICNALE を用いてアジア諸国の学習者英語と日本の学習者英語における高頻度語連鎖の相違を調査し、「日本人の英語エッセイではモダリティや対人関係性を反映する語連鎖の頻度が高く、その特徴が習熟段階においても継続的に見られる」という結果を得た。

２．研究の目的

本研究の目的は、これまでの研究をさらに進めて（１）日本人英語の特徴（イノベーション）を、A)「他の非母語話者英語と共通する特徴」と B)「日本語や日本文化を反映する日本人英語固有の特徴」に区別し、用例毎にその生起理由を分析・分類すること、また、（２）日本人英語と日本人の「言語自我」との関係に焦点を当て、学習者自身が日本人英語を肯定的に受容することが「自分らしい英語表現」への自信を高め、英語の効果的な内在化を促進し、国際発信力の強化につながりうることのエビデンスを提示することにあった。

３．研究の方法

本研究は平成 26 年度から 28 年度までの 3 年間で実施し、1) 国際英語論における先行研究分析及び日本人英語の位置づけの確認，2) 日本語や日本文化の特性に関する先行研究の確認、3) 日本人英語における innovation A、B の抽出、4) 日本人英語への肯定的認識が学習者の英語使用の質や意識に与える影響に関する調査、の四点を関連づけつつ並行的に実施した。

1) 国際英語論における先行研究分析及び日本人英語の位置づけの確認

国際英語論研究の近年の動向を分析し、国際英語理論の中で日本人英語がどのような位置づけを持ちうるかについての分析を行った。国際英語論の先行研究の分析については研究分担者の吉川が、国際英語論における日本人英語の位置づけや研究動向の分析については主に研究代表者の小宮が担当した。

２）日本語や日本文化の特性に関する先行研究の確認

文化の視点から日本語の世界観が日本語の文法や語用論的特性にどのように反映しているかに関する確認作業と整理を行った。この作業は主として小宮が担当した。

3)日本人英語の innovation A、B の抽出

国際的な学習者コーパス International Corpus Network of Asian Learners of English（ICNALE-spoken）を用いて日本人の口語英語使用を英語母語話者や、アジア諸国の非母語話者英語の特徴と比較した。１．日本人英語学習者の発話量はどの程度で、習熟度によりどの程度変化するか、２．母語話者英語との相違はどの程度か、３．アジア圏の英語学習者との相違はどの程度か、について、1 分間の英語発話量の比較を行った。これに関しては、主に研究分担者の石川が担当した。

また、日本人英語の特徴を示す事例の抽出にあたっては、日本人の高校英語教員による自由英作文の主に質的分析を通して確認を行った。この作業は主として代表者の小宮が担当した。

4）国際英語論の英語学習への効果

国際英語論の考え方を知ることにより日本人英語の捉え方に変化が生じたかどうか、日本人英語を尊重する姿勢が英語による発信力や発信姿勢に影響を及ぼすと感じるか、などに関する意識調査を実施した。日本人英語における日本文化特有の特徴に関する指導が日本人大学生の英語の output や意識に与える影響を、8 大学 587 人の大学生を対象とする意識調査を通して確認した。

４．研究成果

1)国際英語論における日本人英語の捉え方

現代英語の多様性と諸英語の位置づけに関し、World Englishes（WE）, English as an International Language（EIL）, English as a Lingua Franca（ELF）を中心に分析し、特に国際英語論における日本人英語の位置づけについての考察を行った。WE 理論では日本人英語を含む Expanding Circle に属する英語への関心は相対的に低く、ELF 理論では英語を system ではなく practice として捉える傾向にあり、「英語変種」に重きを置かない傾向がある。そのような学問動向の中で本研究は、国際英語論のグローバリズムと（Expanding Circle 英語であっても）個別英語の identity の尊重は両立すべきものであり、日本人英語の肯定的受容が日本人の第 2 言語習得に効果を持ちうることを確認した。

2) 日本語や日本文化の特性に関する先行研究の確認

日本人の言語感覚の基底にある「対人意識」や「主観性」が日本語の文法や語用論的特徴にどのように反映しているかの確認を

行った。英語との対比で見た日本語の特性としては、主題優位言語であること、「ウチ・ソト」の対立で周囲を捉える傾向があること、客観世界よりも「世間」へと引き寄せた言語表現を好むこと、「わきまえ」という共通感覚への感受性が文法の根幹に存在すること、様々な言語レベルで「曖昧さ」を肯定していること、などが挙げられる。英語が「原因結果関係」を基軸として世界を語るのに対し、日本語は「主観性と共感性」の表出に重きを置いている。このような言語感覚の違いが日本人の英語使用にも影響を与えていることが想定される結果となった。

3)日本人英語の innovation A、B の抽出

英語の理解力や知識が必ずしも英語の流暢さにつながっていないことが日本人英語の特徴である。国際的な学習者コーパス ICNALE-spoken を用いて日本人の口語英語使用を英語母語話者や、アジア諸国の非母語話者英語の特徴と比較した結果、1 分間における英語母語話者の発話量の平均が 153.28 語、Outer Circle（ESL）圏に属するアジア人大学生が 126.4～145.58 語、Expanding Circle(EFL)圏に属するアジア人大学生の発話量が 65.53～111.04 語であったのに対し、日本人大学生の英語発話量の平均が 69.28 語であり、韓国についで最も少ない語数であることが判明した。

タイプ	語 数	対母語話者比率(%)	国・地域
ENS	153	100	母語話者
ESL	146	95.4	シンガポール
	126-133	82.4-86.9	パキスタン･香港
	125-126	81.7-82.4	フィリピン･香港
EFL	106-111	69.3-72.5	中国･インドネシア
	88-91	57.5-59.5	台湾・タイ
	66-69	43.1-45.1	日本・韓国

表１発話量に基づく発話者のグループ化

Expanding Circle の諸英語に共通する英語特徴を innovation A、日本語や日本文化を反映する日本人英語固有の特徴を innovation B と仮定すると、前者には、単数・複数語尾の消失などにみられる「簡略化」、語彙選択における「上位語」の多用、使用語彙数の少なさ、その他の共通特徴がみられる。

本研究では、innovation B の具体例の抽出を目的に、日本の高校英語教員 19 人による英文エッセイの分析を行った。また、二人の英語母語話者によるコメントの分析を通して、日本人英語に共通すると思われるいくつかの文法・語用論的特徴の確認を行った。分析対象となった各英文エッセイの intelligibility は確保されていたが、以下の①②③において英語母語話者が「曖昧さ」や違和感を感じており、それが innovation B の表出でもあることが判明した。

①意味限定の弱さ

高コンテクスト言語の日本語と低コンテクスト言語の英語では、情報の「限定度・明確さ」への感じ方に相違があり、それが日本人英語の「情報不足感」を生む一つの要因と思われる。日本語では自然であっても、英語になると意味が十分に限定されていないと感じられる事例が分析資料にかなり見られた。

②「格」概念の希薄さ

英文法の「格」概念は、動作主と被動作主の関係や、原因結果関係を基軸とする英語において不可欠な要素であるが、日本人英語においては周辺化されることもある。

（例：The man I talked to. The man I talked about.の to や about が消え,The man I talked yesterday.になる）

③共感表現の多用

日本語は共感性を重視する言語であり、「ね・よ・だ」等の終助詞を共感表現として多用するが、英語ではむしろ「呼称」を多用するなど,日英語の共感表現には相違がある。日本人英語では、終助詞の機能を付加疑問表現に持たせる傾向が見られた。また、日本人の口語英語と文章英語にも相違があり、文章英語では I think などのモダリティ表現の多用が見られた。

ノンバーバルコミュニケーションでは、日本人が「うなずき」を用いて話し手への共感を示すのに対し、英語の nodding は turn taking を迫る失礼な行為に見えるという食い違いがある。しかし「うなずき」が日本人英語のコミュニケーションにおいて重要な役割を持つことなども innovation B として、認知されるべき点であるといえる。

・二つの日本人英語

日系米人の英語の一部において文末に「ね・よ」などが付加されることがあるという事実にも、心理的必然性があることがわかる。日本人が英語を自分化する過程では、innovation B を含む日本人の感覚に沿う「普段着の英語」と、国際通用度を重視する「改まった英語」との場面による使い分けが有用ではないかと思われた。

4）国際英語論の英語学習への効果

国際英語論が日本人の英語学習に与える教育効果については、日本人大学生 587 人を対象に意識調査を行い、国際英語論の学習経験を持つ大学生 68 人の「英語学習への信頼（57.1%）」「英語学習への意欲（90.0%）」「英語力への自信（27.5%）」「多言語学習の必要性への認識（54.3%）」などでの肯定的態度が、その他の学生との比較において顕著に高いことが確認された。その一方で、母語話者英語への憧れの意識は国際英語論の学習の有無に関係なく高い傾向が見られた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３　件）

①石川有香・伊藤多恵「工学英語語彙表を用いた語彙学習における学習方略の使用とその成果」共同研究リポート「言語テキストと学習者特性の量的分析」358、2016、pp23－42

②石川有香「大学教科書分析を踏まえた初年次学生用工学系 ESP 語彙表の作成の試み」中部地区英語教育学会紀要、45、2016、305‐312

③石川有香「English Vocabulary for Engineers 9000 の開発」、社会的要因に着目した応用言語学研究における量的アプローチ（統計数理研究所共同レポート）、374‐374、2017 年、129‐148

〔学会発表〕（計 15 件）

①小宮富子・河原俊昭・石川有香・岡戸浩子・徳地慎二「観光地における多言語サービスの実態と大学観光英語教育のアセスメント」第 53 回大学英語教育学会国際大会、2014 年 8 月 29 日、広島市立大学

②小宮富子　“ELF and Japanese English”, The 7th International Conference of English as a Lingua Franca, 2014 年 9 月 4 日,The American College of Greece

③吉川寛「アジアにおける英語研修・留学」第 34 回日本「アジア英語」学会全国大会・シンポジウム、2014 年 6 月 28 日、京都外国語大学

④吉川寛「実務翻訳、国際言語管理と大学英語教育」中京大学国際英語キャリア専攻開設記念講演会・シンポジウム、2014 年 7 月 5 日、中京大学

⑤吉川寛「国際英語論と大学英語教育」第 53 回大学英語教育学会国際大会（招待講演）「国際英語論と大学英語教育」2014 年 8 月 29 日、広島大学

⑥吉川寛「World Englishes の理念に基づく英語プログラム」グローバル人材育成学会第 1 回中部支部大会、2014 年 10 月 4 日、名古屋大学

⑦小宮富子・吉川寛・石川有香 “Japanese English and “Communicacy”of Japanese ELF Users”, The 8th International Conference of English as a Lingua Franca,2015 年 8 月 26 日,Beijin Foreign Studies University

⑧小宮富子・吉川寛・石川有香「EIL/ELF の視点から見た日本人英語の特徴と課題」第 54 回大学英語教育学会国際大会、2015 年 8 月 30 日、鹿児島大学郡元キャンパス

⑨吉川寛「韓国における英語事情の変化―英語教科書とテレビ CM に見る―」第 53 回日本「アジア英語」学会全国大会、2015 年 12 月 5 日、東洋英和女学院大学

⑩小宮富子・吉川寛・石川有香　“Cultural Identity and English as a Multilingua Franca”The9thInternational Conference of English as a Lingua Franca,2016、Leida,Catalonia

⑪小宮富子「多文化共生時代の英語教育の課題とは何か」大学英語教育学会中部支部秋季定例研究会、2016 年 10 月 22 日、中部大学

⑫小宮富子「英語エッセイに見られる日本人英語の文法特徴に関する国際英語論的分析」大学英語教育学会中部支部春季定例研究会、2017 年 3 月 4 日、名城大学

⑬吉川寛「国際英語論における『国際英語』に関する示唆」大学英語教育学会中部支部大会春季定例研究会、2017 年 3 月 4 日名城大学

⑭石川有香 “Use of modal verbs in academic discourse：Comparison between professionals and graduate students in sience, technology and engineering, Bruno Conference on Linguistic Studies in English,2016 年 9 月 12 日、Masaryk University, Brno

⑮石川有香 “Gender-stereotypes in English used in Korea and Japan, The Korean society of Sociolinguistics,2016 年 11 月 12 日、SoSokmyung Women’s University

〔図書〕（計　５件）

①大谷康照他編、石川有香他著『国際的に見た外国語教員の養成』2015 年、東信堂、374

②石川有香他編、石川有香他著『言語研究と量的アプローチ』2016 年、金星堂、307

③吉川寛・小宮富子他著『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』2016 年、くろしお出版、221

④吉川寛他著『英語学と英語教育の接点』2017 年、金星堂、256

⑤石川有香『応用言語学の最前線―言語教育の現在と未来』2017 年、金星堂、344

６．研究組織

(1)研究代表者

小宮富子（KOMIYA, Tomiko）

岡崎女子大学・子ども教育学部・教授

研究者番号：40205513

(2)研究分担者

石川有香（ISHIKAWA,Yuka）

名古屋工業大学・工学（系）研究科（研究院）・教授

研究者番号： 40341226

(3)研究分担者

吉川寛（YOSHIKAWA,Hiroshi）

中京大学・中京大学文化科学研究所・準所員

研究者番号：90301639